

皆既日食における観光動向からみた奄美大島の観光戦略

尾久土正己、川元 美咲、中串 孝志

実践論文

皆既日食における観光動向からみた奄美大島の観光戦略

Tourist trends at a solar eclipse event and tourism strategies on Amami Islands

尾久土 正己、川元 美咲、中串 孝志

Masami Okyudo, Misaki Kawamoto and Takashi Nakakushi

和歌山大学観光学部

キーワード：皆既日食、エコツーリズム、着地型旅行、ブランディング

Key Words : Solar eclipse, Eco-Tourism, Destination-oriented travel, Branding

Abstract :

Many tourists visited Amami Islands to observe a solar eclipse on July 22, 2009. Tourist trends were examined at the solar eclipse event through a questionnaire and other surveys. In this paper, we introduce the results and propose strategies for tourism on Amami Islands based on the destination-oriented travel.

1. はじめに

近年の観光旅行は、従来の名所旧跡を回る旅行から、旅行者の趣味嗜好の多様化に対応し、また地域の活性化に寄与するために、新しい観光の開拓の必要性が増している。その中で、国は、それまでの観光基本法を全面改正し、平成18年12月に観光立国推進基本法を制定し、翌年1月から施行している。この中で観光旅行の促進のための環境の整備の1つとして、第23条で「新たな観光旅行の分野の開拓」を掲げている。そして、法律の施行を受けて平成19年6月に国土交通省から立案された「観光立国推進基本計画」を見ると、「新たな観光旅行の分野の開拓」で「ニューツーリズムの推進」を提案している。この中では、ニューツーリズムとして、「長期滞在型観光」、「エコツーリズム」、「グリーン・ツーリズム」、「文化観光」、「産業観光」、「ヘルスツーリズム」、「その他のニューツーリズム」、「船旅」、「都市と農山漁村の共生・対流」を具体的にあげて、その推進の重要性を説いている⁽¹⁾。さらに、ニューツーリズムの1つとされるエコツーリズムは、環境省が中心になりエコツーリズム推進法が平成19年6月に成立、翌年4月から施行されている。その第1条の目的で、エコツーリズムが「自然環境の保全」、「地域の観光の振興」、「環境教育の推進」において重要な意義を有していることを述べている。

本論文で取り上げる日食ツアーは、自然現象を対象とするため、ニューツーリズムの1つのエコツーリズムだと考えることもできるが、特定の地域で皆既日食が起こる確率は数百年に一度と珍しく、地域の自然環境との結びつきを重視するエコツーリズムとは一線を画している。しかし、狭い「地域」で

はなく、地球という「天体」スケールでの現象であり、グローバルな視点で自然環境（の保全）のあり方を考えるきっかけになる。その意味で日食ツアーは、「自然環境の保全を強調している観光形態」⁽²⁾であるエコツーリズムに含めることができる。

日食ツアーは、著者たちがすでに2008年にシベリアでの日食ツアーを企画、調査し、その特徴について論じている⁽³⁾ように、多くの旅行者を惹きつける魅力を持った旅行である。皆既日食はほぼ毎年地球上のどこかで起こっているにも拘わらず、その範囲は非常に狭い帯状の地域に限られるために、日本国内の陸地で起こったものとなると、2009年7月22日に奄美地方を通った皆既日食は46年ぶりであった。そのため、奄美地方にそれまでに経験したことがないほど大勢の旅行者が集まることが予想された。また46年前の日食では観光学の観点での調査は行われておらず、本日食が国内での皆既日食に伴う観光調査にとって初めてのチャンスであった。従って皆既日食が奄美大島に与える影響を明らかにすることは観光学研究として意義があると我々は考え、受け入れ計画の企画段階から参与し情報提供することの効果の検証も含めて、調査を行うことにした。

我々は日食が起こる1年前から奄美市が日食のために設置した「2009皆既日食奄美市実行委員会」の事務局と連絡を取り合い、日食ツアー経験者として実行委員会や市民に対して日食準備のアドバイスを行うなどして日食当日を迎えた。そして、実行委員会が宿泊施設を通じて来島者に行ったアンケート調査のデータを提供してもらうとともに、独自で奄美空港で日食が終わって離島する人々を対象にしたアンケート

調査も行った。本論文では、まず第2章でこの日食前～当日の当地の状況を見る。続いて第3～4章で上記のアンケート等による調査結果をまとめる。最終章では、これに加えて奄美群島観光連盟が行った調査結果の再整理・分析を行い、以上全ての結果から得られた観光客の動向に関する知見から、日食後の奄美地域の観光振興のための方策を考察する。

2. 今回の皆既日食の概要と日食前の活動

2-1. 各島での概要

国内の陸地では46年ぶりの皆既日食は、100%太陽が隠される皆既帯が種子島の南部から屋久島、トカラ列島を通り、奄美諸島の喜界島と奄美大島の北部を横切るものであった(図1)⁽⁴⁾。いずれも鹿児島県の離島であり日食ツアーにとっては現地へのアクセス、ホテルなどの観光インフラの面で不利な条件であった。皆既帯は、中心ほど皆既日食の継続時間が長く、南北端でゼロになる。その中心線上での継続時間、即ち最長継続時間が6分を超す今回の皆既日食は、今世紀に起こる皆既日食の中では最長である⁽⁴⁾。この中心線はトカラ列島(十島村)の悪石島付近を通ることから、具体的な日食ツアーの情報が出る以前から日食ファンの関心は、トカラ列島に集中した。トカラ列島には有人島が7つあるが、最大の中之島でも人口は150人ほどであり、村役場はいずれの島にもなく、村営のフェリーで渡る鹿児島市内にある。日食がなければ主に釣りファンが訪れる民宿が各島に数軒ずつあるだけである。そのため、多数の日食旅行者を受け入れるために、村は旅行者を入札で1社に絞り、まったくのゼロからのテント村の設営、食料・飲料を含む必要物資の調達、旅行の予約、金銭授受の一切を委託した。その結果、普段は鹿児島からフェリーで片道6000～7000円程度(2等客船の場合)の料金で行くことができる島でのテント泊のツアー料金が35万円前後という価格になっていた⁽⁵⁾。一般に皆既日食のツアーでは、観測場所と観測時刻が極度に

限定されるために典型的な目的型旅行(SIT; Special Interested Tour)になっており、2倍程度の料金になることは多いが、これほどの価格がついたのは普段は観光客があまり来ない人口600人の村に1000人規模の旅行者を受け入れるための環境をゼロから用意したからである。

本研究では皆既日食に伴う観光動向、地域経済に与える影響、そして今後の観光戦略を考える。そのためには、全島を対象にするよりも、1つの島を選定し集中的に調査する方が今回のイベントの性質を明らかにしやすいと判断した。トカラ列島以外で皆既日食を見ることができるとされた島々は全て飛行機でアクセス可能な島であった。種子島は南端のみ、屋久島と喜界島は全域、奄美大島は北部が皆既帯内に位置していた。先述のようにトカラ列島は皆既日食の条件は良いものの、観光地としては非常に特殊なケースであるために、対象から除外した。残る島のうち、「観光」というキーワードで選べば、屋久島と奄美大島が(他の2島に比べて)観光資源や宿泊施設などの観光インフラの面から考えると調査対象に適している。この2島のうち、屋久島はすでに世界遺産という強い個性を持ってしまっているため、日食が起こる前から注目されており、今後もその観光動向に大きな変化はないと思われる。一方、奄美大島は、人口、産業の面で離島の中では大きな規模を持つが、よく比較される沖縄に比べてあまり観光地化されておらず、日食が今後の観光動向に与える影響は大きいものと考え、今回の研究対象として奄美大島を選ぶことにした。奄美大島を含めて、空港のある島々では普段からある程度以上の観光客が訪れている地域であるため、日食ツアーの旅行代金がトカラ列島のような価格になることはなかったが、通常の日食ツアー並の高さ(2～3倍)にはなっていた。

表1は、日食後に日本銀行鹿児島支店が各自治体に問い合わせたまとめた各島の入島者数である⁽⁶⁾。種子島と十島村(トカラ列島)の入島者数はツアー客のみのカウントになっている。いずれの島でも、多くの家族や親戚、知人が世紀の皆既日食を見るために親戚宅、知人宅を個人旅行で訪れていた。また、この表には一般の個人旅行者も多少は含まれているだろうが、この日食前後に限ると、航空券・ホテルともに大きな枠を旅行社が確保し、さらに予約希望者が殺到したため、航空券とホテルの予約の両方を確保でき実際に個人旅行が成立した旅行者はあまり多くなかったと考えるのが妥当であろう。表1をみると、種子島の数字はツアー客だけ

図1 2009年7月22日の皆既日食の皆既帯
(NASA Eclipse Web Site から)

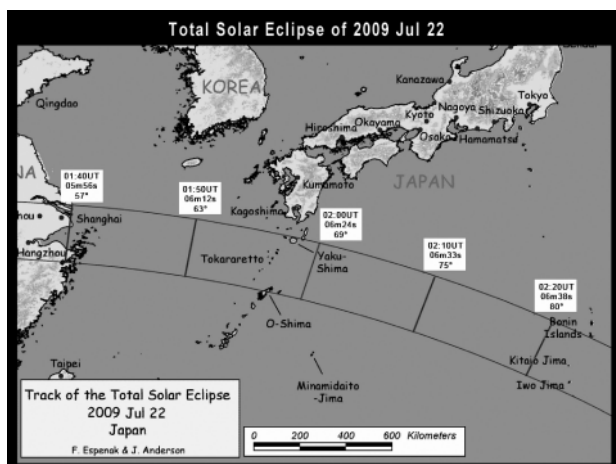


表1 各島の日食に伴う入島者数。種子島と十島村(トカラ列島)の入島者数はツアー客のみカウント。(日本銀行鹿児島支店のレポートから)

	種子島	屋久島	奄美大島	十島村	喜界島
人口	34,000	13,600	68,600	670	8,600
受入可能人数	3,400	4,500	6,800	1,500	1,300
入島者数	3,400*	7,000	13,000	1,085*	2,500

の集計なので、島内のホテル等のキャパシティから予想した事前の受入可能数と一致した数字になっている。一方で、テント泊で約35万円という料金になった十島村では、最終的に空きが出ていたことがわかる。他の島で受入可能数を大きく上回る数字になっているのは、家族、知人などの数も含まれているためと考えられる。

2-2. 奄美大島での事前活動

北部が皆既日食帯に入った奄美大島では東京、大阪からの直行便があるアクセスの良さから多くの日食観測者が押し寄せることが予想された。奄美大島の中心地は名瀬地区で多くのホテルや飲食店が集まるが、皆既帯の中心線に近い北部ほど皆既時間が長くなることから、観測サイトとしては、最北端になる奄美市の笠利地区（旧笠利町）と、笠利地区の次に北部に位置する龍郷町が注目され、テントサイトやイベント会場が設置されることになった。我々は「2009皆既日食奄美市実行委員会」の事務局が置かれた奄美市役所の袖観光課と龍郷町役場をそれぞれ訪問して情報交換を行った。前者とは、情報交換の他に、実行委員会が市民や事業者（商工関係、教育関係、警察など）向けに開催した日食講演会の講師として協力し、2008年9月から日食直前の2009年6月まで地区や団体を変え（計13回）、皆既日食の原理、楽しみ方、そして地元としての受け入れ方について情報提供した（このような情報提供の効果の検証も本研究の目的の1つである）。特に、奄美市の中心地よりも北端の笠利地区の方が皆既時間では長くなることから市民の車の移動による交通渋滞が懸念されたために、時間の長さよりも、自分の生活している風景の中で日食を体験することの貴重性を語ることで、自宅周辺で観察するよう指導した。また、皆既日食の受け入れだけのために大きな投資をしても観光客の増加は一時的なものなので投資に見合う効果が得られないことは明らかである。従って既存の設備で対応し、ソフト面で頑張るように指導した。龍郷町役場では、役場横のグラウンドでテントサイトの設置を予定していたので、準備段階から参画し、2008年のシベリア日食ツアーで共同研究を行った阪急交通社とテントサイトの企画を練った。笠利地区でのテントサイトは、十島村での受入数1500人という大規模なテントサイトを一括受注した近畿日本ツーリストが一括受注の方向で動いていたため我々として協力することはしなかった。阪急交通社が企画した龍郷町のテントサイトでは、我々はテント自体を業者が用意するのではなく、区画だけ販売し、テントはツアー参加者が各自持ち込むことを提案した。著者の一人である尾久土はエジプト日食（2006年）でのテントサイトの宿泊経験があるが、自身の経験及びその際の参加者の声によれば、テントでの宿泊は環境が悪く、旅行者に多くの不満を持たせるものであり、それは奄美でも同様であろうと考えられた。しかし、テントを自分で持ち込めば、テント自体への

不満は業者に対して抱くことはない。むしろ、事前に自分でテントを選ぶところからツアーが実質的に始まっているとも言え、現地でも家族や仲間とテントを組み立てる手間も旅の楽しさになるだろうと考えた。以上が提案の根拠である。その結果、業者が多数の同一規格のテントを確保する必要もなく、集客が予想以下になった場合のリスクも低くなり、結果としてツアー価格を下げることに貢献できた。さらに、龍郷町のテントサイトは公共施設が集まる中心地に設置できたために、近くに体育館、ホール、公衆浴場を持つ福祉施設を利用することができ、テントでの就寝を除けば、整備された環境を提供することができた。

なお、著者の一人の尾久土は、今回の皆既日食では観光調査以外に、ハイビジョンの4倍の解像度を持つ超高精細ビデオカメラを使った全天映像を皆既日食が見ることができない本土に設置したドームスクリーンに生中継するプロジェクトを企画し準備していた。皆既日食は、太陽が月に隠されることで周囲の環境が劇的に変化する自然現象で、実際に観測地に行かないと、その感動を体験することができないと言われていたので、360度の映像を再現することで、遠隔地でも感動を体験できるか検証するためであった。我々は、皆既日食に限らず、全周の映像を超高精細カメラで撮影し再現することで、情報を切り取らない新しい観光コンテンツを提案できるものと考えている。この実験については、別に発表しているのでここでは詳細についてはそちら譲りたい⁽⁷⁾。

3. 奄美大島での日食と実際の観光動向

3-1. 2009年皆既日食の概要

まず今回の旅行者の最大の目的である日食観測の結果について述べておく。日食当時の7月22日は、通常であれば奄美地方は天候の安定した時期であったが、前線が皆既帯に沿って上海周辺から九州南部にかかっていた。奄美大島では、前日まで晴天に恵まれたが当日は朝方から雲に覆われ、皆既前には雲の切れ間から時々太陽が見えたものの、皆既直前には全天を薄い雲が覆ってしまい皆既日食の醍醐味であるダイヤモンドリングやコロナを見ることはできなかった。しかし、覆った雲が薄かったためにスクリーンの役割をして、現地でしか体験することができない月の影（本影錐）が上空に迫ってくる様子が、晴天下での皆既日食よりもよく見えていた。隣接の喜界島では雲が薄く、ほんやりとコロナを見ることができたようである。奄美より北に位置する十島村と種子島、屋久島では雨のために真っ暗になるという変化以外見ることができなかったようである。今回の日食では、上海を含む中国大陆でも観測サイトが設定され多くの旅行者が集まったが、上海も雨であった。また、日本周辺では陸地で見ることができる場所が限られたため、大型客船での洋上での日食ツアーが複数企画されていた。船は天候を見ながら移動できるため、洋上ツアーでは晴天下の日食観測に成功してい

る⁽⁸⁾。

3-2. 実行委員会の調査から見る観光動向の全体像

奄美市で皆既日食の受け入れ準備をしてきた「2009 皆既日食奄美市実行委員会」が日食終了後の2009年10月9日に行った解散総会の資料を事務局から入手できたので、まず、観光動向の全体像を知るために主なものを紹介したい⁽⁹⁾。

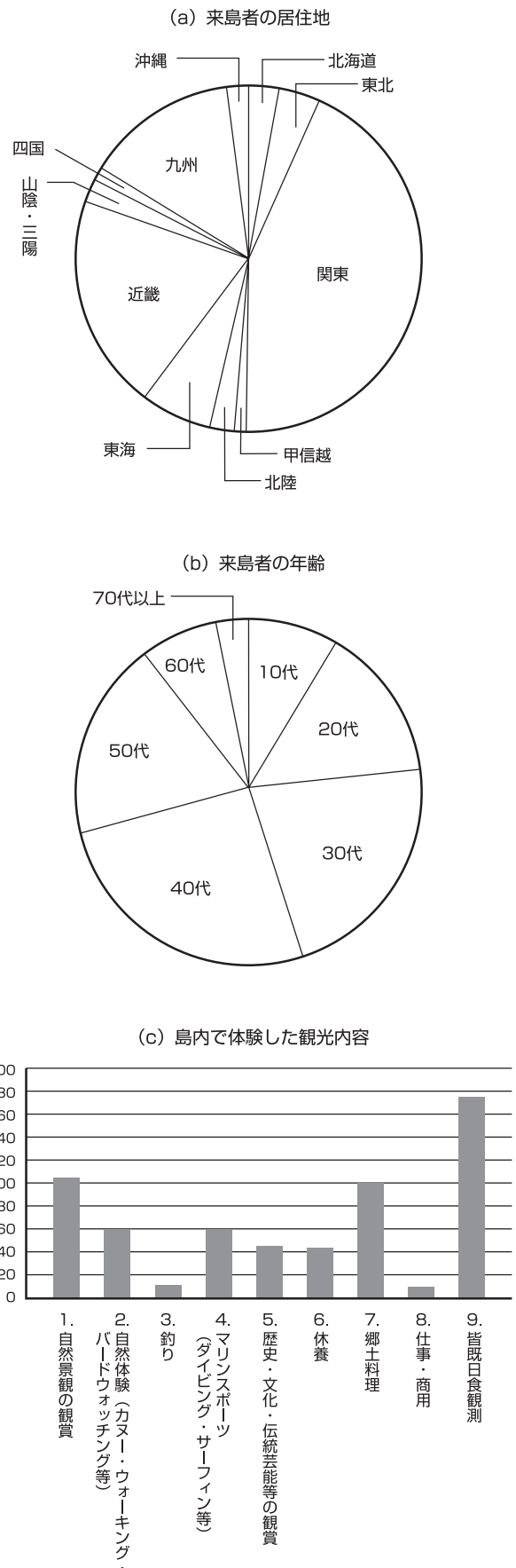
表2は、日食時の島を訪れた人数と宿泊種別ごとの人数である。来島者数は、2009年7月18日の鹿児島下り便(船舶)から、日食直前に到着する7月22日の東京直行便(定期航空機)までの5日間の乗客数を、船舶会社、空港管理事務所及び漁港管理者に照会して集計したものである。当然、予約が比較的容易であった18日以前から来ていた人もいと考えられるので、実際の数は集計よりも多少は多かったものと思われるが約13,000人が訪れている。当初の受け入れ可能人数の6,800人に対して約2倍の人々が訪れたことになる。一方で、宿泊場所の種別ごとの合計では約8,000人である。来島者数とは5,000人の差があるが、これは親戚・知人宅に宿泊した人たちだと考えることができる。さらに、当初の受け入れ可能人数と種別ごとの合計の差は1,200人ほどあるが、日食後のテレビ報道で人気タレントの行動に注目が集まった明神崎で開催された日食音楽祭が、実行委員会とは無関係に準備されたために2,500人分増えたこと、また、笠利地区と龍郷町に設置されたテントサイトが最終的に売れ残ったことなどから、この差が出たものと考えることができる。

実行委員会の解散総会では、奄美群島観光連盟が実施した「宿泊施設利用者を対象としたアンケート」の集計結果も資料として配布されたので、その中から主な結果を紹介したい。有効回答者数は209人であり、ホテル、旅館・民宿などの利用者数全体の6.3%に相当する。図2は、来島者の居住地と年齢の分布、そして島内で体験した内容について、配布資料の数字を元にグラフ化したものである。関東と近畿が多くなっているのは、人口の多さと飛行機の直行便があるためであり当然の結果だろう。九州も多くなっているが、鹿児島島から直行便の数も多く、旅行代金も安くなるため多くの人

表2 奄美大島での日食旅行者の数。島へのアクセス方法(左)と島内での宿泊場所(右)(2009皆既日食奄美市実行委員会「解散総会資料(平成22年10月9日)」より)。

アクセス方法	人 数	宿泊場所	人 数
飛 行 機	6,507	ホ テ ル	1,748
船 舶	5,811	旅館・民宿	1,595
小型飛行機	288	テントサイト	1,976
小型船舶	115	音 楽 祭	2,500
合 計	12,721	野 宿	105
		公 民 館 等	106
		合 計	8,030

図2 来島者の居住地、年齢、島内での体験(実行委員会「解散総会資料」の数字からグラフ化)。



が訪れたものと思われる。なお、実際の入島のルートを船舶会社や空港管理事務所の便別で見ると、便数の多さから鹿児島を経由しての入島が多くなっていた。年齢では、40代が最も多く、30代、50代と続くが、広い世代が訪れたことがわかる。高齢者が比較的少ないのは、多くのツアーがテント泊で夏の奄美大島を考えると過酷な条件であったこと、そして普段の当地域のツアー代金に比べて高価になっていたことが影響したものと考えられる。さらに、この期間に宿泊施設を利用して人が具体的にどんな体験をしたかについて聞いたところ、日食観測を除くと自然景観の観賞、郷土料理が多く、自然体験、マリンスポーツが続いていた。

実行委員会では、その解散総会資料の中で、利用者へ島内で消費した金額についても質問しており、そこから一人あたりの平均消費額を求め、13,000人を乗ずることにより約8.1億円の総消費額があったと報告している。しかし、先に述べたように、うち5,000人は親戚・知人宅に宿泊していたと推測される。また、アンケートはホテル・旅館などの宿泊施設において実施されたものであり、表2によれば宿泊施設利用者の合計は全体の8,000人の4割に過ぎず、その他の6割の人たちはテントサイトや同じくテント泊になった音楽祭の人たちがほとんどを占めていたことになる。これらの宿泊施設以外の手段で滞在していた人々が、アンケートに回答した宿泊施設利用者と同様の消費をしたとは考えにくい。現時点で、テントサイトや親戚・知人宅に宿泊した人たちの消費額を推定することはできないが、実際の総消費額はかなり少ないものと考えられる。実行委員会では、総消費額を8.1億円として、公園のトイレ整備などの受け入れのための公共事業や受け入れ対策費として約1.2億円を支出しており、直接の経済効果として、計9.3億円の需要が発生したとしている。その結果、波及効果が4.5億円、トータルで13.8億円の経済効果があったと報告している。この額の検証方法の1つとして、ここから予想される税収に対して、実際にどの程度の税収があったかを調べることで、その妥当性を知ることはできるかもしれない。現在も引き続き継続している調査において確認する予定である。

4. 来島者の意識調査

前章では、実行委員会の資料から観光動向の基礎的資料を紹介したが、同じ資料の中で、旅行者（ホテル等の利用者）に対して奄美大島の観光についての意識調査を行った結果が報告されていた。その主なものを紹介するとともに、我々が離島者に対して奄美空港で行ったアンケート調査について紹介し、旅行者の意識について議論したい。

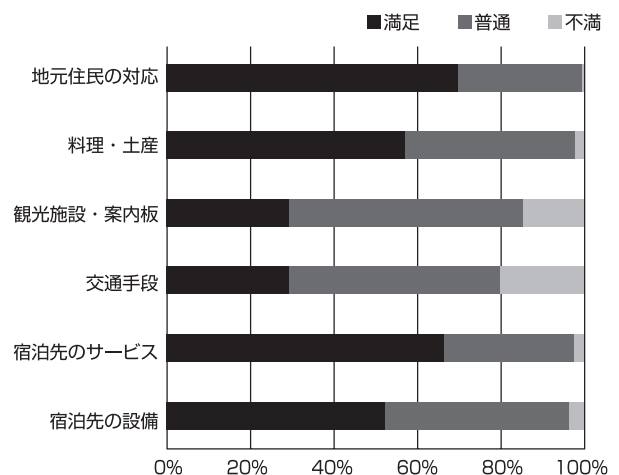
図3は、「地元住民の対応」、「料理・土産」、「観光施設・案内板」、「交通手段」、「宿泊先のサービス」、「宿泊先の設備」の各項目についての満足度を尋ねたものと、再び奄美大島を訪問したいかについて尋ねたものである。満足の高いも

のをみると、「地元住民の対応」、「宿泊先のサービス」、「料理・土産」と続き、いずれも高い満足度になっている。「宿泊先の設備」については満足が半分になり、「交通手段」、「観光施設・案内板」と満足度が低下するが、不満の数を見ると「交通手段」に対する意識が最も悪い。満足の高いものはサービスであり、低いものはハードである。宿泊先の設備については、前章でも指摘したように本調査にはテント泊が含まれていないので、日食旅行者全体の意識とは必ずしも一致しないことに注意したい。また、再び訪問したいかという質問に対しては、一人の回答者を除く全員が是非、あるいは機会があれば訪れたいと回答しており、宿泊施設を利用した旅行者を見る限り、全体として満足度の高い旅行であったことが明らかである。

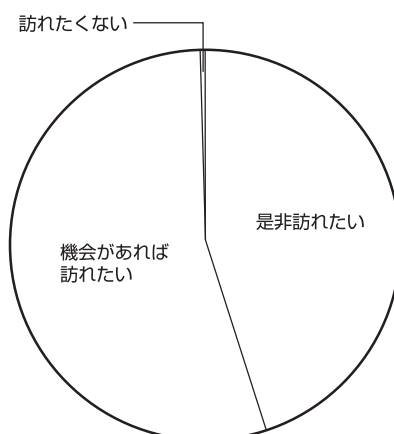
一方、著者の一人である川元が中心となり、通常の宿泊施設でのアンケート調査を行った観光連盟とは別に、宿泊場所に関係なく、日食後に奄美空港から離島する旅行者を対象に出発ロビーで質問者による対面のアンケート調査を行った。この調査では今回の日食旅行の満足度を100点満点で

図3 宿泊利用者の奄美大島の観光に対しての意識調査の結果（実行委員会「解散総会資料」の数字からグラフ化）。

(a) 奄美大島の観光のハード、ソフトに関する満足度



(b) 再訪問についての意思



旅行者の主観で評価してもらった。22日の午後の便で出発する旅行者が多かったために、調査は22日の午後に行い、回答者は85人である。その結果、平均点は78点と高い数字になった。これを宿泊施設別に分けて平均すると、ホテル等が77点、笠利地区のテントサイトが67点、龍郷町のテントサイトが84点、知人宅が85点であった。また、ホテルの中から設備の充実しているリゾートホテルだけを選ぶと75点であった。この結果から、施設のハード面での良し悪しと満足度に単純な関係がないことがわかる。特に注目したい点は、笠利地区と龍郷町の2つのテントサイト間での評価の差である。サンプル数は、笠利地区が11人、龍郷町が8人と少ないが、17点というポイント差は十分に有意な値だと考えて良いだろう。龍郷町テントサイトの満足度を押し上げた理由は何だろうか。例えば、(i) 龍郷町側のテントサイトの周辺設備が良かった (ii) 自前のテントを持ち込む企画が成功した (iii) 龍郷町側では直前にも尾久土による情報提供があった、などが考えられる。十島村でのテント泊旅行者からの不満の声が報告されていることから(後述)、(i) または (ii)、あるいはその両方が龍郷町の高い満足度に貢献していることは確かであろう。(iii) に関して補足すると、龍郷町のテントサイトに隣接するホールで開催された前夜祭の中で、講師として尾久土が日食の楽しみ方について講演しており、その中で、天候が心配されること、日食はダイヤモンドリングやコロナが全てではなく、周辺環境の変化こそ現地地しか体験できないものであることを強調していた。翌日、オプションツアーとして用意されたカヌー体験参加者に行ったインフォーマル・インタビューでは、「曇っても日食は感動的なものであった」と多くのツアー客から直接感想を聞くことができた。さらに住民からも同様の声を多く耳にしている。従って、事前の情報提供が一定の寄与があった可能性は大いにあるだろう。なお、龍郷町のテントサイトには和歌山医科大学と高野山大学の学生・教員が研修のために宿泊しており、報告が行われている^(10, 11)。これらからもテントサイトの環境や、スタッフ・地域住民の対応が十分なものであったことが報告されている。さらに付記しておく、奄美大島では、住民の多くが日食を継続時間の長い北部へ移動して観察するよりも自宅で見ることを選択し、懸念されていた交通渋滞はほとんど起こらなかった。これも尾久土が各地区での講演会等で繰り返し強調していた事柄の1つであった。

観光連盟の行った調査結果の図3 (a) でハードよりソフトでの満足度が高いことと、空港で川元が行った調査において全平均点が78点と高く且つ施設のハード面の善し悪しと満足度に単純な相関がないことは、調和的である。それぞれ別の観点から同様の結果が出たものと考えて良いだろう。日食ツアーの主なる目的は日食観測であり、曇ったにも拘わらず、両方の調査で高い満足度が出たことから、奄美大島の観光のソフト面に関しては十分なレベルであったと結論づけ

られる。

旅行者に対する意識調査は、十島村でも行われた⁽⁵⁾。それによると、ツアー全体の満足度は、「満足」と「やや満足」を合わせて63.5%であった。また、テント、体育館、民宿と宿泊場所の種別に関係なく集計された施設の満足度では、満足度は合わせて44.5%であった。生データがないため詳細はわからないが、テント泊の旅行者からは不満の声が多かったと報告されている。再訪問の意思について尋ねた質問では、「大変そう思う」が38%、「ややそう思う」が39.6%と合わせて77.6%が再訪問の意思を表明した。本調査における奄美の例と単純に比較はできないが、日食が雨になったこと、テント泊では宿泊環境が悪かったこと、そして何よりも35万円という高価なツアーになったこと等の悪条件にも拘わらずこれほど再訪問の意思表明率が高いこの結果は、十島村でのツアーも満足度の高いものであったためであると考えて良いだろう。十島村では住民に対する調査も行われた結果、旅行者と交流した住民は半数に達したものの、今回の受け入れ体制に対しての評価に「良かった」と回答した住民は38.2%に過ぎなかった。このことは、今回の日食イベントが島のキャパシティを大きく超え、島民の生活に大きな負担をかけた結果であろう。

5. 今後の観光戦略

5-1. 観光連盟の調査結果の再検討

観光連盟と我々の行った調査結果の双方で満足度の高い結果となったが、今後の観光戦略を考える上で、より深く解析するために、実行委員会から個々の回答用紙を入手し、再度、データ入力を行い、別の角度からの集計を行った。特に注目したのが、年齢構成の分布の広さである。そこで、年齢層を切り口に、日食旅行中の島内での体験内容と、満足度(再度訪れたいか?)の2項目について再集計したのが図4である。なお階級の分け方であるが、図2 (b) をみると、60代以上をひとまとめにすると大きな偏りのない集団を作ることができることがわかる。10代は自分の意思で旅行行為を行っていない子どもが多いと考えて、島内での体験内容での再集計では除外した。年齢別に体験した内容を比較すると、「自然景観の観賞」や「郷土料理」のように年齢による違いのないものがある一方で、「マリンスポーツ」や「歴史・文化・伝統芸能等の観賞」のように明らかな年齢による差が出たものもある。若い世代は海で身体を動かすことに興味を持ち、年齢を重ねるにつれて歴史文化に触れることを望んでいる。また、再訪問についての意思は今回の旅行の満足度を表す1つの指標として考えることができるが、30~40代と10代のファミリー層で満足度が高い一方で、年齢が高くなると満足度が下がっていくことがわかる。このことは、歴史文化に興味のある層の満足度がやや低いとも言い換えることができる。今回の旅行の目的が日食観測であったことから、各社が設

定したオプションツアーは自然を観光対象としたものに重点が置かれていたのかもしれない。しかし今後の我が国の観光を考えると、他の世代に比べて人口が多く、経済的にも比較的豊かな団塊世代の観光が大きなウエイトを占めることが予想されるため、奄美大島の観光を考える上で十分に注意しなければいけない結果である。

5-2. 「奄美遺産」を活用した着地型観光

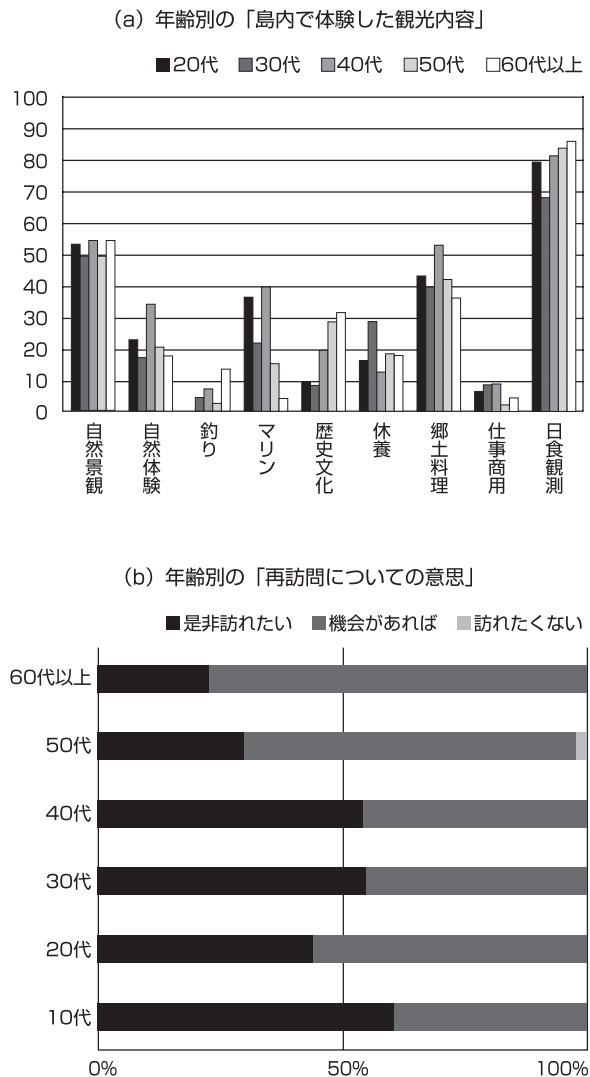
なお、今回の皆既日食の影響に関して、喜界島における旅行者の観光行動についての天野による調査報告が存在する⁽¹²⁾。この調査では、主に島内で日食観測の前後に旅行者たちがどのように点在する観光資源を巡ったかについて調査している。それによると、旅行者の多くは積極的にレンタカー、レンタバイク、レンタサイクルなどを利用し島内を観光していることが明らかになっている。このような、旅行のメインの目的（この場合は皆既日食）に付け加えられるオプション

ルな目的・行動にはどのような傾向があるかを明らかにすることは重要であろう。前章までに述べたように今回の我々の調査などから、確かに奄美大島の観光についてのソフト面での満足度が高いことが明らかになった。しかし詳しく見ると、年齢別の集計は、歴史・文化に興味が高くなる高い年齢層に対して、欠点とは言えないものの、やや弱い点があることを示している。例えばアマミノクロウサギのような奄美諸島にしか生息しない貴重な生物を育む自然は重要な観光資源になることは言うまでもないが、奄美大島の特徴は自然ばかりではない。例えば独特の歌唱方法を持つ島唄は、その歌唱力の高さから多くのメジャーミュージシャンを送り出し、奄美の伝統文化の特徴として全国に知られている。これらの独特の文化は、400年前に琉球から薩摩の支配下に入った歴史を反映するものである。沖縄でも本土でもない奄美の文化は、我々の再分析が明らかにした上記の「奄美観光の弱点」をカバーし得る、自然遺産に並ぶ奄美大島が持つ重要な観光資源なのではないだろうか。

奄美諸島では、平成20年度から3カ年を使って奄美博物館などが中心になり「奄美遺産」の指定が進められている⁽¹³⁾。通常、「遺産」は文化財保護法に基づき指定される文化財を指すことが多いが、「奄美遺産」は地域住民が生活の中で感じるものすべてを対象にしている。そのため博物館学芸員のような専門家だけで収集・選定することはできず、多くの住民が参加することになる。この住民の参加により、「奄美遺産」が博物館や行政だけのものではなく、住民の意識の中でも共有されるようになることが期待される。近年、旅行社が募集するツアーを見ると、従来の分刻みでお決まりの名所旧跡を回る団体行動から個々の趣味嗜好に合わせたオプションを多く取り入れた個人行動を主体とした内容が主になりつつある。観光地でのオプションが多くなるということは、観光地に詳しい地元側の旅行業者の負担が多くなることを意味しており、従来のように出発地側の大手の旅行者がほとんどの業務を分担する（出）発地型旅行から、（到）着地型旅行になっているとも言える。この着地型旅行への動きは、長野県飯田市を中心とした南信州で先駆的に事業展開され、全国に波及している⁽¹⁴⁾。このような着地型観光を提案するのは地元であり、「地元遺産」を知り、その価値を地域住民が共有していることが大切である。奄美地域では「奄美遺産」のリスト作成という先駆的な地域の宝の発掘事業にすでに着手しており、3カ年の事業期間がまもなく終わろうとしている。完成したリストを使って着地型旅行を企画、運用できれば、他の地域にない新しい観光メニューを提案できるだろう。先の調査結果は、団塊の世代を中心とする50代以上は旅行の目的に歴史文化を持つ場合が多いことを示した。この結果は、「奄美遺産」を活用した着地型旅行の事業展開が重要になるであろうことを示唆している。

地域の文化を活用した着地型旅行を事業展開し、成功さ

図4 年齢別に再集計した行動内容と、再訪問についての意思（実行委員会「解散総会資料」の元データを入手し再集計）。



せるために忘れてはいけない観点が、これらの遺産リストのブランディングである。住民によってリストアップされた遺産がいくら多くあっても、それらは世界遺産のように1つ1つの遺産だけで大きな観光資源になるようなものばかりとは限らない。そのため、奄美遺産に共通し、全体としてストーリーを描くことができるキーワードを設定することには意義がある。その1つの候補を、既に行政が行った調査研究の中に見ることができる。奄美地方は、沖縄同様、本土との格差を是正するために多くの特別な振興策が行われている。沖縄では、「沖縄振興特別措置法」に基づいて「沖縄県観光振興計画」が作られ、体験・滞在型観光の推進に資する取り組みが実施されている。奄美でも、同様の奄美群島振興開発特別措置法が制定され、観光の振興をうたい、観光業への優遇措置などが行われている。鹿児島県が平成20年3月にまとめた「奄美群島振興開発総合調査報告書」を見ると、法の整備によって道路などのインフラの整備は進んだものの、地場産業は衰退しており、大島紬に至っては最盛期の1割以下までに落ち込んでいる⁽¹⁵⁾。着地型旅行が目される中、地場産業の衰退は大きな痛手である。そこで、調査報告書を元に新しく平成21年10月に鹿児島県が制定した奄美群島振興開発計画（平成21年度～25年度）では、「人と自然が織りなす癒しの島・奄美の創造」という言葉がキャッチコピーに採用されている⁽¹⁶⁾。奄美遺産のブランディングにこのコピーを利用しない手はないだろう。

ブランディングの次に必要になるのが、南信州で実際に着地型旅行を企画運営している観光公社のような事業体の整備であろう。住民たちで創り上げた「奄美遺産」の観光に活かそうとしても、それらの価値を十分に理解できない発地側の事業者には任せては意味がない。観光の企画・手配の重心が奄美になってこそ、他の地域にないオリジナリティが生まれるだろう。観光協会などの組織が手配旅行などの観光事業を行うためには第3種旅行業などの資格取得など、観光業に精通した人材の確保も必要であろう。地元の遺産のリスト化、そしてそのブランディング、そして受け皿の整備を行った上でも、離島特有の課題が立ちはだかっている。それは、島へのアクセスのための航空運賃の高さである。2010年秋、これまで日本航空系の独占区間であった奄美線に格安航空会社のスカイマークが格安料金で参入した⁽¹⁷⁾。これを契機として奄美への旅行者が増え、沖縄路線に比べても割高な航空運賃が下がることも期待できるかもしれない。高速道路の料金引き下げや無料化による地域振興策が政府によって実施されているが、離島の振興に関しては航空運賃の補助が同様の意味を持つ。今後の振興策の中で、航空運賃に対する施策が行われることを期待したい。

かつて旅行は、非日常を体験するために行われる行為だと言われてきたが、奄美に残された自然や伝統文化は、長い人類の歴史の中で見れば、そちらの方が日常であり、瞬きす

るほどの短い時間に大きな変化を遂げた都市生活の方が人類にとって非日常なのかもしれない。21世紀の新しい観光は、人類が本来持つ日常への回帰現象であり、その行為の1つが着地型観光なのかもしれない。

2010年7月12日（日本時間）には、クック諸島から仏領ポリネシア、イースター島を通して、南米のパタゴニアで終わる皆既日食が起こった。著者の一人の尾久土は、仏領ポリネシアに浮かすHAO環礁で観測を行ったが、日食情報センターのまとめによると、日本から5つの地域に25グループ、900人が渡航したという⁽¹⁸⁾。中でもモアイ像が世界遺産に指定されているイースター島に世界から5000人（うち、日本人が500人）集まったという。イースター島は3800人の島であり、人口以上の人々が訪れたという意味では、本研究と比較研究として興味深い。今後、海外の研究者による観光動向についての研究発表があることを期待したい。

謝辞

本研究を行う上で、奄美市役所の重久春光氏（日食当時は奄美市産業振興部観光課プロジェクト2009調整監）、奄美博物館の中山清美館長をはじめとする奄美市のスタッフに、龍郷町のテントサイトの企画では、前町長の田畑茂光氏をはじめとする龍郷町役場のスタッフ、そして阪急交通社の森川清弘氏らに大変お世話になった。また、奄美空港での調査では日食ツアーに参加していた和歌山大学の学生の皆さんにお世話になった。さらに、奄美大島で日食前の約1年、そして日食後の1年に個々の名前を紹介できないほど多くの島民の皆さんから献身的な協力をいただいた。ここに感謝の意を表したい。

参考文献

- (1) 国土交通省「観光立国推進基本計画」
http://www.mlit.go.jp/kisha/kisha07/01/010629_3/01.pdf, (2007.6).
- (2) 長谷政弘編著「観光学辞典」(1997.12)
- (3) 尾久土正己、川元美咲、吉田尚弘：「シベリア皆既日食ツアーとその参加者の意識調査」、和歌山大学観光学部設置記念論集, pp.39 - 54 (2009.3).
- (4) NASA Eclipse Web Site, <http://eclipse.gsfc.nasa.gov/eclipse.html>
- (5) 十島村「2009年トカラ皆既日食～小さな島の大きなプロジェクト」(2010.3).
- (6) 日本銀行鹿児島支店「皆既日食と離島観光」
<http://www3.boj.or.jp/kagoshima/data/note/n090902.pdf>, (2009.9).
- (7) 尾久土正己、荒川佳樹、佐藤正人、藤井竜也、白井大介、徳永正己、西垣順二、大場省介、香取啓志、吉住千重紀、萩原文恵、渡辺健次：「4 K全天映像を使った皆既日食の超臨場感中継」、Internet Conference 2009 論文集, pp. 91 - 99, (2009.10).
- (8) 福江純：「ふじ丸の黒い太陽と赤い水平線」、天文月報, 第102巻, 第11号, pp. 693 - 698, (2009.11)
- (9) 2009皆既日食奄美市実行委員会「解散総会資料（平成22年10月9日）」, (2009.10).
- (10) 青木香奈、西村美香、福元仁：「皆既日食観測テント村の公衆衛生学的考察」、和歌山戦略的大学連携支援事業第1回報告会発

表資料, (2010.1).

- (11) 藤吉圭二:「過疎地における大量の人口移動を伴う観光事業への取組み～奄美大島・龍郷町を事例として～」『高野山大学論叢』第45巻, pp. 55 - 70, (2010.2).
- (12) 天野 宏司「皆既日食観測者の受入と観光行動-- 鹿児島県大島郡喜界町を事例として」、駿河台大学論叢, No. 40, pp. 185 - 203, (2010).
- (13) 宇検村、伊仙町、奄美市教育委員会「広域的に進める奄美諸島の事例」、文化庁月報, No. 496, pp. 28 - 29 (2010.1).
- (14) 尾家健生、金井萬造 (編)「着地型観光～地域が主役のツーリズム」、学芸出版社 (2008.11) .
- (15) 鹿児島県「奄美群島振興開発・総合調査報告書」
<http://www.pref.kagoshima.jp/pr/shima/kaihatsuchosa/amasinhoukokus-yo.html>, (2008.3).
- (16) 鹿児島県「奄美群島振興開発計画」
http://www.pref.kagoshima.jp/_filemst_/45992/amasinkeikaku21-25.pdf, (2009.10).
- (17) 例えば南日本新聞2010年7月1日付記事、2010年8月31日付記事など.
- (18) 日食情報センター編集部「2010年7月11日皆既日食観測の全体まとめ」、日食情報, No. 2, pp. 1 - 3 (2010.10).

受付日 2010年10月4日

受理日 2010年11月11日